

新潟中央短期大学

暁星論叢

第60号 抜刷

(平成22年12月)

保育学生が抱く親の愛情のイメージ

佐々木 宏 之
細 川 千 秋

保育学生が抱く親の愛情のイメージ

佐々木 宏 之
細 川 千 秋¹

人が天から心を授かっているのは愛するためである
ニコラ・ボアロー（フランスの詩人、批評家）

愛情（Love）とは何か。愛情という概念は、広義には労働や趣味への情熱、あるいは所有物や土地への愛着を含み、また、国家や会社組織など、所属するコミュニティへの同胞感情や忠誠心を指す。いずれにおいても、そこには、単なる好ましさ（Like）では説明し得ない特別な感情が付随している。いうまでもなく、特別な感情をもっとも強く引き出すのは肉親や恋人などの近い存在であり、したがって狭義の愛情は近親者へのパーソナルな愛着感情ということになる。愛情の定義づけを試みた Fehr & Russell (1991) は、構成概念の典型的性質（プロトタイプ）を求める手法（Rosch, 1975）を用いて愛情のプロトタイプを調べた。その結果、プロトタイプ度の高いものとして評価されるのが親の愛、友愛、きょうだい愛、恋愛であることを見出している²。実証研究の結果もまた、パーソナルな愛着感情が愛情という概念の中心的な意味合いがあることを支持しているのである。そしてこのことは、愛情がその機能をもっとも発揮するのが、パーソナルな愛着感情であることと無関係ではない。無論それは、種の保存のための機能である。

人間が人間らしい心を持つに至ったのが、種の保存という生物の根源的な目的に由来すると見做すボアローの名言は、至極もっともな見解である。成体に達するまで20年もの長きに渡る人間が、生殖行動と養育行動を促すために、異性に対する愛情と家族に対する愛情を有するのは全く機能的である。しかしながら、そうした機能的意義に鑑みれば、愛情に関する心理学研究は決して多くない。例えば、異性に対する愛情、つまり恋愛感情は、古今東西を問わず万人の関心を引くために、古来より多くの芸術作品の主題となってきたが、にもかかわらず実証的研究の俎上に載るようになったのは1970年前後で（例えば、Rubin, 1970）、その歴史はそう古くはない³。もともと心理学は、怒り、不安、欲求不満、葛藤、偏見といったネガティブな心理状態に研究の力点を置く傾向があり（Czapinski, 1985）、愛情のように通俗的でポジティブな色合いを帯びる心理現象は研究対象になりにくいのである。

- 1 現さつき野保育園保育士。本論文は新潟中央短期大学平成20年度卒業論文において発表された研究をもとに作成された。
- 2 これは北米での調査に基づく結果であるが、本論では“愛”と“Love”の概念上の文化差は無視できるものとして議論を進める。
- 3 本論の関心は親の愛情にあるので、恋愛感情については概説しない。恋愛研究の動向については Sternberg & Weis (2006) を参照されたい。

一方、親の愛情については、子どもの発達との関連が注目されてきた。親の愛情のかけ方一つで、子どもの愛着行動は大きく変容し（数井，2005）、愛情が欠如すると（母性剥奪 maternal deprivation）子どもの心身の発育に甚大な影響を及ぼしてしまう（Schaffer, 1998）。その影響は青年期以降にも及び、パーソナリティ障害をはじめとした様々な精神症状に現れる。虚言癖や窃盗癖などの問題行動を示す者、あるいは過食症や境界性人格障害の人の成育歴を調べると、幼少期の歪んだ親子関係や愛情剥奪が認められることが少なくない（岡田，2004，2005）。

このように、親の愛情は子どもの発達を支えるという一面が強調されるため、これまではもっぱら「その欠如」といったネガティブな視点において顧みられてきた。加えて、上述した心理学研究のネガティブ志向（Czapinski, 1985）もあり、親の愛情それ自体を取り上げる研究はほとんど見られない。大日向（1988）は、親の愛情の研究が少ない理由として、親の愛情が生得的な能力だとみなされてきた点を指摘し、親の愛情が“母性本能”の一語で片付けられてしまうと、人間らしい思考や感情、親としての成長に目が向けられなくなると論じた。また、村松（1999）によれば、母性の強調が性役割といったイデオロギー的にデリケートな問題を孕んでしまうことも、母性研究が発展しない遠因となっている。

このように、心理学において母性が等閑視されるなか、花沢（1992）は「母性心理学」を標榜し、母性を解明する研究の重要性を説いた。以来、母性意識、母性感情について、その発達変容、世代差、文化差などが丹念に調べられている（花沢，1992；松村，1999；大日向，1988）。近年、人の才能や長所といったポジティブな機能に焦点を当てる「ポジティブ心理学」(Seligman & Csikszentmihalyi, 2000) が注目され、学問的なネガティブ志向を乗り越えようとする機運が高まっており、母性や親の愛情のようなポジティブな心理機能は、今後の発展が期待される研究テーマとなるであろう。花沢（1992）らの先駆的な研究が、その道標としての役割を果たすに違いない。

こうした母性研究の高まりの兆しは、認知神経科学のアプローチにも見ることができる。近年、複数の研究グループ（Bartels & Zeki, 2004；Nitschke et al., 2004；Noriuchi, Kikuchi, & Senoo, 2008）が母性愛の脳内基盤の解明に挑み、脳の活動領域を可視化する機能的磁気共鳴画像（functional Magnetic Resonance Imaging；fMRI）によって母性愛を司る脳内部位を特定した。これらの研究結果に共通して見られるのは、母性感情において重要な役割を果たす脳内部位が、報酬を得たときに活動する領域として知られる眼窩前頭皮質（orbitofrontal cortex）にあるということだ。眼窩前頭皮質はいわゆる脳内麻薬の神経伝達物質ドーパミンの投射を受け、報酬系ネットワークの中で重要な役割を果たしている。したがって、母親にとって我が子との触れ合いは、何よりのご褒美ということなのかもしれない。

本研究の目的

一連の母性研究では、愛情を抱く当事者が研究対象となっている。恋愛感情の研究においてもそれは同様だが、恋愛感情は思春期の前後に誰しものが抱くため、それがどのようなものかは当事者としての経験から誰でもイメージすることができる。翻って親の愛情がユニークなのは、「親の心子知らず」「子を持って知る親の恩」といった諺に表現されるように、生まれてから絶えず享受してきたにも関わらず、自らが親となるまでは正しく想像することも適わないという点にある。そのため、恋愛のイメージは生涯に渡ってさほど大きく変わらないのに対し、親の愛情のイメージは、発達段階に伴って劇的に変化すると考えられる。

恋愛イメージに関する研究においては、それまでの恋愛尺度が特定の相手への愛情に焦点を当てているため、金政(2002)は恋愛に対する普遍的な期待や態度を扱った尺度の作成に取り組んだ。しかし、親の愛情に対する期待や態度は、親になる前後で、つまり愛情を授ける側と受ける側とで、質的に大きく異なることが予想されるため、親の愛情尺度に世代間の普遍性を求めること自体、内容的妥当性に欠ける試みだと言えよう。

そこで本研究では、子どもの立場からの親の愛情イメージに着目し、青年期における親の愛情イメージを探索的因子分析により検証した。第二反抗期を過ぎて家族に対する感情が安定する青年期は、親に対する感謝の念が高まる時期でもある(池田, 2006)。また、本研究の調査対象である保育学生は、育児への関心、知識があり、したがって親の愛情については他の同世代に比べて見識を備えていることが期待できる。保育現場での実習等で親の愛情に触れる機会がありながら、自らは親でないため身をもって実感することもない。親の愛情のイメージを調べるには興味深い対象である。

また、自らは親として愛情を抱くことのない保育学生にとって、親の愛情イメージの形成は、自分の親の養育態度や親との関係に拠るところが大きいはずである。したがって、これまでの親子関係から積み上げてきた親の愛情イメージが、自身に向けられた愛情への態度や将来の親子像を築き上げていることが予想される。そこで、因子分析の結果得られた親のイメージ因子と、現在の親子関係、自身への愛情に対する態度、将来の親子像との関連を検討した。

方法

親の愛情イメージ項目の選定

研究目的を知らない協力者30名に「どのようなときに親の愛情を感じるか」をテーマに聞き取り調査を行った。その結果得られた回答内容に加え、金政(2002)による恋愛イメージ尺度の尺度項目を参考にして、親の愛情イメージ項目を作成した。内容的妥当性、項

目類似性、表現のわかりやすさを念頭に吟味した結果、最終的に16項目を利用することとした。

回答者と実施方法

新潟中央短期大学幼児教育科の学生を対象に調査を行い、男性32名、女性227名の計259名の回答を得た。調査時期は2008年11月下旬と2010年5月中旬である。

調査内容

アンケートは以下の項目から構成されている。(1) 親の愛情イメージ項目：「親の自己満足だ」「なにげない優しさである」等の16項目(表1参照)。(2) 親子関係を問う項

表1 親の愛情イメージの記述統計量

	平均値	標準偏差
子どもの願いを聞き入れることだ	4.02	1.28
親の自己満足だ	2.84	1.46
子どもへの愛情は、親ならもって当然だ	6.08	1.03
子どもの幸せを願うことだ	6.23	1.04
子どもになくってはならないものだ	6.15	1.11
子どものためなら自分を犠牲にする	4.80	1.48
なにげない優しさである	5.24	1.10
親になれば自然に抱くものである	5.39	1.30
子どもを過保護にする	2.98	1.51
子供の成長の糧である	5.27	1.19
子供を心配することだ	4.56	1.36
親の愛情が、子供を束縛する	3.84	1.38
子どもへの愛情が、親の力の源となる	4.81	1.16
子どもに何かをしてあげたいと思うことだ	4.85	1.15
子どもへの厳しさである	4.87	1.17
親の押し付けである	2.87	1.34

目：「父親と仲が良い」「母親と仲が良い」の2項目と「親子関係がもっとも良かった時期」を問う項目。(3)現在の自分にとって親の愛情はどのようなものを問う項目：「心の支えになっている」「うっとうしい」「幸せな気分にさせてくれる」「こたえようと意識する」「重荷になっている」の5項目。(4)自分が親になったときの状態を予想する項目：「子どもが「生きがい」である」「自分の親を手本として、子どもに接する」「よい親子関係を築くのは難しそうだ」「できるかぎり育児に専念したい(してほしい)」「子どもに愛情を持てるか自信がない」の5項目。

以上、「親子関係がもっとも良かった時期」を問う項目を除く全てにおいて、“全く思わない=1”から“非常にそう思う=7”の7件法の評定を行った。「親子関係がもっとも良かった時期」を問う項目には、幼児期、小学生、中学生、高校生、現在の選択肢が提示された。

表2 親の愛情イメージの因子分析結果

	I	II	III	共通性
子どもの幸せを願うことだ	.877	.071	-.005	.774
子どもになくってはならないものだ	.535	.094	-.288	.378
子どもへの愛情は、親ならもって当然だ	.497	.217	-.115	.308
親になれば自然に抱くものである	.422	.288	-.171	.290
子どもへの厳しさである	.045	.603	.166	.393
子供を心配することだ	.128	.600	.059	.380
子どもに何かをしてあげたいと思うことだ	.159	.589	-.090	.381
子どもへの愛情が、親の力の源となる	.152	.485	-.107	.270
親の自己満足だ	-.100	-.040	.624	.400
親の押し付けである	-.187	-.122	.601	.411
親の愛情が、子供を束縛する	-.076	-.021	.583	.346
子どもを過保護にする	-.068	.196	.481	.275
寄与率(%)	13.36	12.54	12.47	
累積寄与率(%)	13.36	25.90	38.37	

因子の解釈に利用した項目の因子負荷量(.4以上)を太字で示した。

結 果

本研究では女子学生を研究の対象とし、男子学生のデータを除く227名の回答を分析に用いた。欠損値については以下に記述する通り、分析ごとに除去した。なお、分析はWindows版SPSS ver.12を用いて行った。

親の愛情イメージの因子分析

欠損値を含んだ11名のデータを除いた216名の回答を分析に用いた。まず、親の愛情イメージの回答について各項目の平均値と標準偏差を表1に示す。3つの項目で天井効果が疑われる高い平均値を示したが、一つの選択肢に50%以上が集中している項目がないことから、回答の散らばりは十分確保されていると捉え因子分析(最尤法、バリマックス回転)を実施した。その結果、固有値1以上の因子が5つ認められた。いずれの因子にも高い負荷量を持たない項目(0.40未満)や複数の因子で高い負荷量を示した項目を除去し、繰り返し因子分析を行った結果、最終的に12項目から3因子が抽出された(表2)。

第1因子は、「子どもの幸せを願うことだ」「子どもになくってはならないものだ」などといった項目に高い因子負荷が見られたため、「本能的性質」因子と命名した。第2因子は、「子どもへの厳しさである」「子供を心配することだ」などといった項目が高い因子負荷を示したため、「親役割」因子と命名した。第3因子は、「親の自己満足だ」「親の押し付けである」などといった項目に高い因子負荷が見られたため、「自己中心的態度」因子と命名した。次に α 係数から各因子における内的一貫性を検討したところ、「本能的性質」因子が.70、「親役割」因子が.66、「自己中心的態度」因子が.66となり、いずれの因子においても決して高い内的一貫性とは言えない。

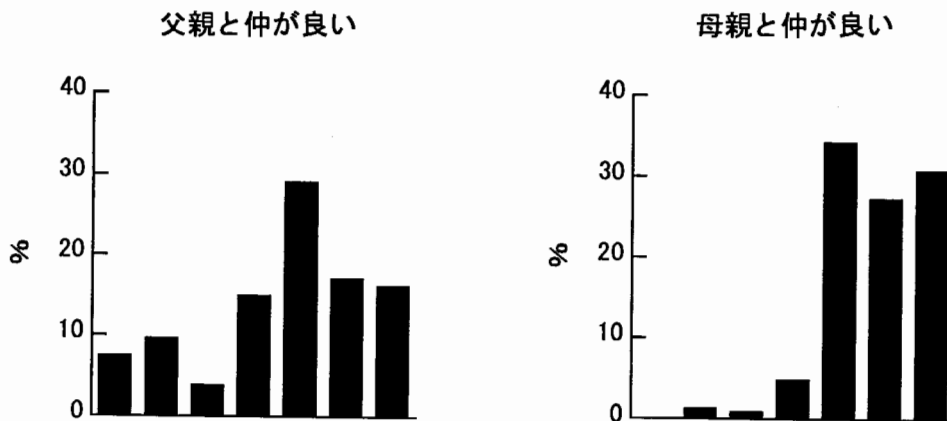


図1 横軸が示すのは左から「全く思わない」～「非常にそう思う」の7件法の尺度水準である。

表3 親の愛情イメージと親子関係

	N	本能的性質	親役割	自己中心的態度
父親と仲が良い	213	.213**	.240***	-.151*
母親と仲が良い	215	.215**	.259***	-.252***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

親の愛情イメージ×親子関係

現在の親子関係についての回答のヒストグラムを図1に、現在の親子関係と親の愛情イメージ因子得点との相関係数を表3に示す。弱い相関ながらも、父親との関係、母親との関係ともに、全ての因子と有意な相関が見られた。「自己中心的態度」因子については、父親との関係に比べると、母親との関係において強い相関が現われた。また、「父親と仲が良い」と「母親と仲が良い」の2項目間の相関係数は.40であった ($N=223$)。

「親子関係がもっとも良かった時期」を尋ねた項目への回答は、その大半が幼児期 ($N=42$)、児童期 ($N=50$)、現在 ($N=96$) に別れた。そこで、幼児・児童期にもっとも親子関係が良かった群と現在もっとも親子関係が良い群の2群で、親の愛情イメージの因子得点に差があるのか t 検定を行った。その結果、「自己中心的態度」因子において、幼児・児童期に親子関係が良かった群は現在の親子関係が良い群より有意に高い因子得点を示した ($t=2.135$, $p<.05$)。

親の愛情イメージ×自分にとっての親の愛情

現在の自分にとって親の愛情がどのようなものか尋ねた項目について、各回答の平均値と標準偏差を表4に示す。そして、これらの項目を目的変数とし、親の愛情イメージの因子得点を説明変数とする重回帰分析を行った(表5)。因子得点は直交回転によるもので、本来的に多重共線性の問題はない。なお、変数は強制投入とした。

いずれの項目においても決定係数は高いとは言えず、したがってモデルの説明力は高くはないが、モデルの有意性検定では有意な結果が得られている。項目ごとに標準偏回帰係数の絶対値を比較すると、親役割因子は「心の支えになっている」項目の寄与が、自己中心的態度因子は「うっとうしい」項目と「重荷になっている」項目の寄与が顕著である。

親の愛情イメージ×自分が親になったときの状態

自分が親になったときの状態を予想する項目について、各回答の平均値と標準偏差を表6に示す。そして、これらの項目を目的変数とし、親の愛情イメージの因子得点を説明変

表4 「自分にとって親の愛情がどのようなものか」の記述統計量

	平均値	標準偏差
心の支えになっている	5.36	1.19
うっとうしい	2.96	1.45
幸せな気分にならせてくれる	4.65	1.30
こたえようと意識する	4.37	1.38
重荷になっている	2.72	1.46

表5 「自分にとって親の愛情がどのようなものか」項目を目的変数としたときの重回帰分析結果

	決定係数(R ²)	F(3, 211)	標準偏回帰係数(β)		
			本能的性質	親役割	自己中心的態度
心の支えになっている	.209	18.63***	.161**	.353***	-.211***
うっとうしい	.227	20.61***	-.163**	-.177**	.395***
幸せな気分にならせてくれる	.139	11.40***	.193**	.212**	-.212**
こたえようと意識する	.070	5.26**	.110	.180**	-.140*
重荷になっている	.246	22.91***	-.161**	-.207***	.404***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

表6 「自分が親になったときのことを想像して」の記述統計量

	平均値	標準偏差
子どもが「生きがい」である	5.55	1.03
自分の親を手本として、子どもに接する	4.64	1.62
よい親子関係を築くのは難しそうだ	4.12	1.62
できるかぎり育児に専念したい(してほしい)	5.41	1.11
子どもに愛情を持てるか自信がない	2.35	1.3

表7 「自分が親になったときのことを想像して」項目を目的変数としたときの重回帰分析結果

	決定係数 (R^2)	F(3, 211)	標準偏回帰係数 (β)		
			本能的性質	親役割	自己中心的態度
子どもが「生きがい」である	.272	26.36***	.266***	.326***	-.267***
自分の親を手本として、子どもに接する	.238	22.10***	.129*	.296***	-.350***
よい親子関係を築くのは難しそうだ	.057	4.27**	-.098	.011	.211**
できるかぎり育児に専念したい(してほしい)	.131	11.58***	.201**	.274***	-.066
子どもに愛情を持てるか自信がない	.063	4.74**	-.081	-.054	.225***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

数とする重回帰分析を行った(表7)。因子得点は直交回転によるものなので、本来的に多重共線性の問題はない。また、変数は強制投入とした。

いずれの項目においても決定係数は高いとは言えず、したがってモデルの説明力は高くないが、モデルの有意性検定では有意な結果が得られている。項目ごとに標準偏回帰係数の絶対値を比較すると、親役割因子は「子どもが生きがいである」項目、「できるかぎり育児に専念したい(してほしい)」項目の寄与が、自己中心的態度因子は「自分の親を手本として、子どもに接する」項目、「よい親子関係を築くのは難しそうだ」項目、「子どもに愛情を持てるか自信がない」項目の寄与が顕著である。

考 察

本研究は、子どもの立場からイメージする親の愛情について因子分析による検討を行った。その結果、親の愛情に生物としての必然性を見出す「本能的性質」因子、親の立場として子どもに奉仕する態度に注目する「親役割」因子、自分本位の愛情が子どもにネガティブな作用をもたらすという「自己中心的態度」因子が抽出された(表2)。今回の調査では、回答者への負担を軽減するためアンケートの項目数を少なめに抑えたこともあり、内の一貫性と累積寄与率は共に低水準であった。したがって、尺度としての有効性はあまり高くないが、親の愛情という多元的概念を捉えるための方向性を導き出すことはできたとと言える。

本研究の調査対象が出産・育児経験のない保育学生であったのに対し、岡本らのプロジェクトでは、子を持つ親を対象に縦断的な調査(妊娠中～5歳の期間)が行われた(岡本・菅野, 2008)。彼らの研究は、SCT(文章完成法)⁴を用いて親のイメージを記述させ、その回答内容をKJ法⁵で分類するという方法を用いている。その結果として導出されたカテゴリーには、「本能的性質」因子のように親の存在(つまり自分自身)を客観視するものや、「自己中心的態度」因子のようにネガティブな側面に注目するものは見られなかった。このような対照的な結果は、2つの研究の調査対象の違いを反映していると考えられる。“親の愛情に対する期待や態度は親になる前後で質的に異なる”という我々の予想の通り、親の愛情の多元性を客観的に評価する子ども(保育学生)の視点と、愛情を抱く主体(親)の視点で、イメージの相違が生じたのである。ただし、我々の研究と岡本ら(2008)の研究には、調査方法と分析方法の違いがあることに留意しなければならない。特に、

4 SCT(Sentence Completion Test)は文章の書き出しを提示し、その後続く文章を自由に記入させ、回答内容に映し出された個性を理解しようとする投影法の心理テストである。

5 KJ法とは、複数の多様な質的データを、類似性や共通性のあるものにグループ化し、グループ同士の関係を図解することで、全体像や構造を把握しようとする技法である。ただし、統計的分析ではなく、恣意的分類であるため、客観性に欠ける。

岡本らが採用した SCT という方法が、本研究の質問紙尺度に比べてより主観的肯定的な傾向を導いた可能性は十分に考えられる。その可能性を排除するためには、本研究の調査対象者である保育学生自身が親になったときに、親の愛情イメージがどのように変化するかを調べなければならない。岡本ら（2008）の結果のように、愛情を授ける側の主観的な偏りが見られるのか、今後の縦断的な研究が期待される。

次に、親の愛情イメージと他の項目（親子関係に関する項目、自分にとっての親の愛情を問う項目、将来の親子像に関する項目）との関係を見ていくことにする。その考察を通じて、親の愛情イメージの各因子の意味するものが、より明確になるはずである。

親の愛情イメージ×親子関係

親子関係に関しては、「自己中心的態度」因子に顕著な結果が見出された。「親子関係が良好な時期」の比較において、「自己中心的態度」因子の因子得点が高かったのは、幼少の頃に仲が良かったとする群だった。したがって、現在に比べて幼少の頃の方が親子の仲が良かったと考える一因は、現在の親に「自己中心的態度」を感じることにあると言えよう。また、親子関係と各因子の相関について、父親と母親で比較すると（表3）、「自己中心的態度」因子は母親との仲をより強く反映していることがわかった。「自己中心的態度」の因子負荷量が高い4項目（「親の自己満足だ」等）に対しては否定的な回答に偏り（表1）、同時に、大半が母親との仲を肯定的に捉えていることを併せて踏まえると、親の愛情に対する「自己中心的態度」のイメージは、母親との仲の良さに伴って否定的に捉えられるのかもしれない。無論この結果に示された父母の差に関しては、本調査の調査対象が女子学生であることも留意すべきである。

親の愛情イメージ×自分にとっての親の愛情

自分にとって親の愛情がどのようなものか問う項目については、モデルの説明力は低水準ながらも、いずれの項目も親の愛情イメージを反映したものであることが見出された。特に、標準偏回帰係数に顕著な差が見られた項目に注目すると、「うっとうしい」、「重荷になっている」といったネガティブな評価についての項目は「自己中心的態度」因子が寄与することがわかった。一般的に、親に対する否定的感情は青年期前期に見られるものだが（宮下，1996）、親の愛情の否定的評価は親の「自己中心的態度」に対するイメージと結びつく形で青年期後期になってもなお残存することが示唆される。対して、「心の支えになっている」というポジティブな評価についての項目は「親役割」因子の寄与が顕著で、「青年期後期に強くなる感謝の念が「援助してくれることへの嬉しさ」を反映している」とする報告（池田，2006）を支持するものとなった。また、いずれの項目においても「本能的性質」因子の影響が比較的小さいのは、この因子が生物学的客観的事実に関するイメ

ージのため、自らの体験との結びつきが弱いことが原因として考えられる。

親の愛情イメージ×自分が親になったときの状態

将来の親子像に関する項目についても、モデルの説明力は低水準ながら、親の愛情イメージが影響していることが見出された。標準偏回帰係数に顕著な差が見られた項目に注目すると、「自分の親を手本として、子どもに接する」かどうか親子関係の世代間伝承について尋ねた項目では、「親役割」因子と「自己中心的態度」因子の関与が認められた。対照的に、「できるだけ育児に専念したい」という母性理念を測る項目は「本能的」因子と「親役割」因子を反映するが、「自己中心的態度」のようなネガティブな側面は母性理念に影響しない。この経験は育児経験によって育児に対する肯定的な態度は高まるが、否定的な態度に相違はないとする花沢(1992)の知見を支持するものとなった。したがって2つの研究結果から、母性理念の形成が育児に対するポジティブな意識に規定されることが示唆される。最後に、「よい親子関係を築くのは難しそうだ」「子どもに愛情を持てるか自信がない」といった将来に対する不安を表明する項目は、「自己中心的態度」の影響が認められた。つまり、将来への不安とは、親としてすべきことができない不安というより、不適切な態度をしてしまう不安を意味しているのかもしれない。そして、これまでに明らかになったように、「自己中心的態度」が現在の自身の親への感情を反映したものであることを考慮すると、将来への不安は自分の親子関係のネガティブな側面によりもたらされるのだと言えよう。

結びにかえて

本研究は、「愛情を授ける親の視点と愛情を受ける子どもの視点では、親の愛情イメージは質的に異なる」という予測を作業仮説として、子どもの立場から考える親の愛情イメージについて因子分析を行い、さらにその結果得られた3つの因子を説明変数とする重回帰分析を行った。各因子の内的一貫性とモデルの説明力は共に高い水準には至らなかったが、親の愛情イメージの構造を解明するという試みは一定の成果を収めたと言えよう。総合すると本研究で確立されたのは次のような枠組みである。

- 1) 親の愛情に生物としての必然性を見出す「本能的性質」のイメージは、親の愛情についての客観的事実に関するイメージであるため、自己の経験との関連は弱く、将来の育児態度を予測しない。
- 2) 親として子どもに奉仕する態度に注目する「親役割」のイメージは、自分の親子関係を反映したもので、親の愛情に対するポジティブな意識と、自分の将来のポジティブな親子像に結びつく。
- 3) 自分本位の愛情が子どもにとってはネガティブに作用するという「自己中心的態度」

因子は、現在の自分の親子関係を反映し、親の愛情に対するネガティブな意識と、自分の将来の親子関係に対する不安を引き起こす。

本研究の調査対象である保育学生は、育児についての知識があり、育児に対する肯定的意識を持ち、そして恐らく親との良好な関係を結んでいる。したがって、子どもの立場を代表するサンプルにしては偏った属性を持つ特殊な集団である。果たして本研究で確かめられたイメージ構造は、親の愛情を享受する子ども世代全般に適用できるのか、それとも、養育者たる保育学生が抱く親の立場へのシンパシーのために、むしろ親の視点からの愛情イメージに近似したのか、今後のさらなる検討が期待される。

引用文献

- Bartels, A., & Zeki, S. (2004). The neural correlates of maternal and romantic love. *Neuroimage*, 21, 1155-1166.
- Czapinski, J. (1985). Negativity bias in psychology: An analysis of Polish publications. *Polish Psychological Bulletin*, 16, 27-44.
- Fehr, B., & Russell, J. A. (1991). The concept of love viewed from a prototype perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 425-438.
- 花沢成一 (1992). *母性心理学* 医学書院
- 池田幸恭 (2006). 青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析 *教育心理学研究*, 54, 487-497.
- 金政祐司 (2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から— *対人社会心理学研究*, 2, 93-101.
- 数井みゆき (2005). 「母子関係」を越えた親子・家族関係研究 遠藤利彦編 *発達心理学の新しいかたち* 誠信書房 Pp. 189-214.
- 松村恵子 (1999). *母性意識の構造と発達* 真興交易医書出版部
- 宮下一博 (1996). 人間関係の発達と対人的感情 齋藤誠一編 *人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係* 培風館 Pp. 109-133.
- Nitschke, J. B., Nelson, E. E., Rusch, B. D., Fox, A. S., Oakes, T. R., & Davidson, R. J. (2004). Orbitofrontal cortex tracks positive mood in mothers viewing pictures of their newborn infants. *Neuroimage*, 21, 583-592.
- Noriuchi, M., Kikuchi, Y., & Senoo, A. (2008). The functional neuroanatomy of maternal love: Mother's response to infant's attachment behaviors. *Biological Psychiatry*, 63, 415-423.
- 岡田尊司 (2004). *パーソナリティ障害—いかに接し、どう克服するか* PHP 新書
- 岡田尊司 (2005). *子どもの「心の病」を知る—児童期・青年期とどう向き合うか* PHP 新書
- 岡本依子・菅野幸恵編 (2008). *親と子の発達心理学—縦断研究法のエッセンス* 新曜社
- 大日向雅美 (1988). *母性の研究 その形成と変容の過程：伝統的母性感への反証* 川島書店
- Rosch, E. (1975). Cognitive representations of semantic categories. *Journal of Experimental Psychology: General*, 104, 192-233.
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265-273.

- Schaffer, H. R. (1998). *Making decisions about children : Psychological questions and answers*. Oxford : Blackwell. (無藤隆・佐藤恵理子訳 (2001) *子どもの養育に心理学がいえること—発達と家族環境* 新曜社)
- Seligman, M., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology : An introduction. *American Psychologist*, 55, 5-14.
- Sternberg, R. J., & Weis, K. (2006). *The new psychology of love*. New Haven : Yale University Press. (和田実・増田匡裕訳 (2009) *愛の心理学* 北大路書房)